Osaka University Knowledge Archive

Title	上海中医学院訪問記
Author(s)	川俣, 順一
Citation	癌と人. 1989, 16, p. 5-7
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24020
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

上海中医学院訪問記

川　俣　順　一*

昭和63年12月，私は招かれて上海中医学院を訪問した。最初に訪問したのは61年秋で，今回で3回になる。私が現在奉職している関西鍼灸短期大学と上海中医学院とは交流協定を締結しており，人的ならびに情報の交流をすることになっている。私は，今年5月に上海中医学院の，陸徳銘院長が来学されたとき，客員教授の委嘱を受けた。担当科目は実験動物とある。そのようなわけで今回の上海行きの目的は，中医学院に建設する動物実験センター（動物実験中心）の指導と実験動物に関する講義，懇談をすることにあった。

中医学と動物実験

中医学というのは，わが国でいう東洋医学のことといってまずさしつかえないであろう。東洋というのは，中国では文字どおり，中国の東の海であるから，それには日本も当然入り，中医学とはならないわけである。戦争中，日本人は東洋鬼と軽蔑され嫌われた。

元来，医学に西洋も東洋もないはずであるが，主としてヨーロッパにおいて発達した近代医学に対して，古代中国で発達し，その後朝鮮半島から，あるいは東シナ海を経て直接日本にも伝来した医療を東洋療法あるいは，東洋医学と日本ではよばれるようになった。中国では長い間この伝統的な医療が受け継がれさらに新中国建設後は一般の医学教育・研究とともに，それが中医学としてとりあげられ今から30年程前に中国各地，たとえば，北京，上海，天津，広州，長春，などに中医学院が開設された。中医学は英語では Traditional Chinese Medicine とよばれている。通常，西洋医を養成する医学院が6年制であるのに対して中医学院は5年制であるほかは，卒業後の資格も中医師として認められており，もちろん診断，治療，投薬等の医療行為も認められている。この点がわが国とは非常に異なっている。このような中医学の研究は，一般の医学研究と同様であるが，中医学的治療法の効果を実験的に証明したり，ある病気の治療法の一つとして中医学的方法の効果を探ろうというものが多い。

今回とくに注目されたのは，高齢化社会において，中国においても老化が大きな問題であり，その意味で老人病あるいは，老化防止に対する関心である。そこで，そのような研究にはどうしても老人病のモデル動物や，早く老化現象を示すモデル動物が望まれている。ご承知のように中国は古来不老長寿には関心が高く，秦の始皇帝が不老長寿の仙薬を求め徐福を東海にあるという蓬莱の国に派遣して日本に来たという伝説があるくらいであるから，今も熱心に研究されていても不思議ではない。治療法としては主として漢方薬（中葯，薬）が使われ，とくに，上海中医学院で開発してすでに一部市販されている物についてさらにその薬効の薬理学的，免疫学的，組織学的（超微細構造的）な研究が，臨床研究とともに精力的に進められていた。データでみる限りかなり効果があるようであった。現在ではその処方をさらに改良して，それについての基礎的，臨床的研究が始められていた。私もその製剤をもらってきた。今後，上海と共同で研究する予定である。

このような製剤の研究で興味深いのは，処方

*大阪大学名誉教授（関西鍼灸短期大学長）

に使われている漢方薬に，いわゆる高貴は使われていない。その理由として，中国においても，社会保険の適用されるものが選ばれているということであった。

動物実験センター

中国各地においては今ブームといわれる程実験動物センターが建設されている。中国にはまだわが国や米国のような商業ベースの実験動物生産事業がなく，実験動物の供給はもっぱらセンターや研究所の自家繁殖に依存している。今回上海中医学院が建設するものは，そのような繁殖供給とともに，動物実験のためのものである。中医学院でこのようなセンターは中国では最初であるとのことであった。その規模は決して大きいものではないが，予算，資材の点から可能な範囲で非常な苦労をしながら，1989年5月完成を目標に努力が続けられていた。これが完成すると，上海中医学院の動物実験の成績は飛躍的に向上することが期待されている。私に総括的な指導が求められているのでその責任は極めて大きいのである。しかし，私が関係した動物実験施設が，中国に残ると思うとやり甲斐のある仕事だと思い，なんとか役に立ちたいと考えている。

寒山寺の鐘

月落烏啼霜満天で始まる「楓橋夜泊」の詩や寒山拾得の石刻で有名な寒山寺は私が一度訪ねてみたいと思っていた名所である。今回は着いた翌日が日曜日であったので，上海中医学院の研究部長が車で案内してくださった。上海の市内から走ること約3時間，蘇州に墨絵のイメージを抱いていた私には，いささか期待外れの感があったが，かねて拓本でのみ知っていた詩碑のほとんどすり減った原型を見ただけでも訪れた甲斐があった。大晦日には日本人の団体が大挙押し寄せるということであった。それは，この寺の鐘楼の鐘を一突きすると，命が10年延びるというのである。日本人様様というところである。こんなところまで，経済大国日本の観光団の波が及んで居るのである。この寒山寺行きのドライブも印象的であった。というのは，追い越しはクラクションの音高らかに自由自在，センターラインを越えての追い抜きもしばしば。それでは交通取締まりは無いのかというと，さにあらず。私を乗せていた車も，まんまとひっかかり，5元の罰金を運転主さんは払っていた。沿道の看板も面白い。所々に饂飩というのが目についた。日本では「うどん」だが，中国では日本の「雲呑（わんたん）」に相当するのだそうである。雲呑のほうが正しいのだそうである。食べ物のはなしばかりで恐縮だが，車で走っていると，ふと焼き芋の匂いがした。尋ねてみるとまさに焼き芋だそうである。注意していると，確かに道端で七輪に網を載せてさつま芋を焼いていた。

胃の無い男の食道楽

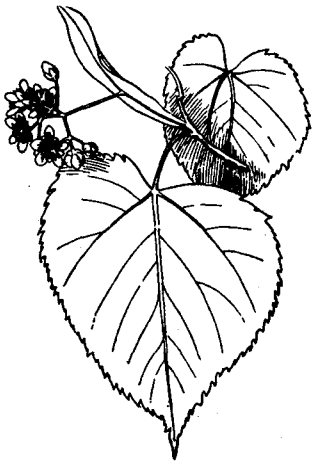
食べ物の話しのついでに，中華料理についてひとこと。私は18年前，阪大微研病院で胃の摘出手術をしていただいた。おかげで，70歳の今でも元気に働いている。ただ，食事には注意をしているてもりである。外国へ行くというと皆さんが食事のことを心配して下さる。しかし，私は感染に注意する以外ごく普通にしている。中国へ行くというと，油濃い食事で大変でしょうといわれる。ところが，大変ではないのである。ことに上海ではそうである。日本にいるときでも私は五目汁そばが体にあう。上海でもよく汁そばを食べるが，日本よりあっさりしていて大変よろしい。そばも日本の素麺のような感触である。有名な小篭包も結構いただける。第一，朝食にお粥がたべられる。副食物になじみのないものもあるが，大抵はたべられる。上海では，朝食の時から甘い八宝飯（圓子）が食後のデザートに出されることもある。八宝飯といえば，上海では，宴会料理に出されるものにも，

まんなかに，甘い餡が入っている。辛党には甘すぎて耐えられないだろうが。中華料理に飽いたら，フランス料理にありつくこともできる。50年も前からの老舗というから戦前からの店がある。上海へ行かれた方ならご存知と思うが，メインストリート准海路中程の紅房子西菜館がそれである。本格的なフィレミニヨンが驚くほどの安いお値段で食べられる。私の大学の卒業生で現在留学中のＹ君を中医学院の先生(通訳)といしょに招待したが，Ｙ君は，久々のステーキに感激していた。

豚のアキレス腱

帰国する前の晩，中医学院国際鍼灸研修センターの職員餐庁（食堂）で夕食会に招かれた。その席上でも中医学による成人病，老人病（癌を含め）の予防，治療について話しに花が咲いた。そのときも，医学の先進国としての日本に対する大きな期待が寄せられた。日中国交回復以来起伏はあったが，日本に対する一般民衆の関心も急速に高まりつつあることはすでに皆様ご存知のところである。それだけにわれわれの責任も大きいといわねばならない。日本と言えば，その日，鍼灸や漢方の本を買いに街に出た時のことである。ふと聞こえてきたのが，あの懐かしい，瀧廉太郎の“花”のメロディーではないか。上海の街角で聞く“春のうららの隅田川……”なんという意外性，驚き，感激。日本よりはるかに古い，偉大な文化を築いた中国，ただ近代化の過程において被った数々の被害，第２次大戦後の建設途上においてみられたいささかの遅れをいま，新しい近代化路線で克服しつつある中国。政治のことはいざ知らず，すくなくとも医学，科学の面でできる限りの協力を惜しまないことがわれわれにできることでは無かろうかと思われる。

その日の御馳走は，とても大学の職員食堂のものとも思われないものであった。少し旬は過ぎていたが，名物の上海蟹にもお目にかかった。終わり近くに出された料理に正体不明のものがあった。さっそくクイズ番組よろしく三回だけ答が許された。私はどれもハズレで，それは実は，豚の脚のアキレス腱であった。豚の耳から脚の先まで食べ尽くす民族のパワー。ここに中国民族の底力を見る思いがしたというのはいささか言い過ぎであろうか。



LINDEN.
（しなのき）